

全入時代の英語教育

English Education for Non-elite Students

付岡 京子*

Kyoko Tsukeoka

1. 全入時代の到来

18人口の減少がいわれて久しい。高等教育機関の現状数に対する志願者数の比率は減少の一途をたどり、特に私立では経営の危機がさし迫る学校もでてきている。という事は、一方志願者の立場にたてば、学校さえ選ばなければ、希望する者は入学できるという時代が来ているという事である。かつてのように学校が学生を選ぶのではなく、学生が入学校を選ぶ時代になったという事であろう。いいかえれば、学生の絶対数の減少により、「大学優位の売手市場から学生優位の買手市場への移行」⁽¹⁾が始まり、学生の奪い合いという現象がおきている。その為、受験者増を狙って受験科目をへらしたり、時代の要請に応えられるような学部学科の新増設に、各大学こぞって奔走するという事態がおきている。確かに学生のニーズを察知する事なしに教員主導でやっているのは、これからの高等教育は成り立たない。

2. 学生のニーズ—その本根と建前

以上みてきたように、学生のニーズにあわせた大学側の対応が必要な事はない。しかし、この学生のニーズというものが、一筋縄

ではいけないところがある。本学の状況をみても、特に英語専攻の志願者は、入試の面接では皆口をそろえて、「英語が好きである」、「英語の勉強は苦にならない」といってはばからない。ところがいざ入学すると、予習をしてくる学生はほんの一握りで、大部分の学生は、授業数はできるだけ少ない方がいいと思っており、土曜はもちろん、平日でも午後は自由時間にしてほしいという学生さえ少なからずいる。入試面接でほとんどの受験生が、あれ程勉強したいといっていた英語を母国語とする外国人教師担当の英会話も、必修でなく選択にすると、一桁の希望者すら出てこない。大分以前の事になるが、英語専攻2年の選択科目として外国人教師による英会話をおいた時、受講希望者が余りにも少なく、授業が成り立たない事があった。学生の本根と建前が違う事を思い知らされて、がく然としたものだった。それ故学生が口にする希望を額面通りに受け取ると、実態とかけ離れてしまう危険性がある。入試の面接等で口にする希望は、確固とした目的意識に基づくものではない可能性が強い。仕事で使える英語を身につけるには、自らも努力する必要がある事を自覚せずに口にしてきているようだ。

特に最近の学生は努力を嫌うばかりでなく、そもそも努力そのものに余り価値をおいていな

*英語専攻

いように思われる。準備のいる事は苦手で、極端な場合には、テキストも辞書も学校のロッカーに置きっぱなし、授業が始まってから初めてテキストがない事に気付き、おもむろに許可を求めて取りに行く学生があとをたたない。これではどころんでも予習等できるわけがない。予習等最初から念頭にないものと考えざるを得ない。以前専攻で学生にとったアンケートの中で、授業に対する希望という項目に関して、「唯座っているだけで分かるような授業をしてほしい。」という解答に遭遇して、目を疑ってしまった事があった。自分では努力をせず、できない、分からないのはすべて教え方が悪いからだときめつけてしまう。かつてアメリカのテレビニュース(CNNの American Edition,1998年1月8日)でアメリカとアジアの教育の違いをとりあげたものがあった。そこに登場してくる日本人学生は、教育に於いて大事なのは学ぶ側の勤勉さであるといったが、現状では日本でも学ぶ側の努力という事が極端に軽んじられている風潮があるように思われる。教える側に教え方の工夫が求められるのは当然だが、それですべて片付くわけではない。むしろ片付けようとする所に問題があるのではないだろうか。つまり教育は、教える側と教わる側の相互作用がはじめて成り立つのであって、学生も与えられる事のみ求めている限り、本当の意味で学ぶ事はできないのではないだろうか。

3. 英会話指向

英語学科の場合、社会福祉学科や住居学科の場合と違って、学科の性質上はじめからはっきりとした目的意識をもって入学してくる学生はほとんどいない。唯漠然と英語がしゃべれたら格好がいいから、何となく英語でもやってみようかといった位の軽い気持で入ってくるので、ちょっと努力を要する大変な事にぶつかると、嫌になってくじけてしまう。

特にリーディングの場合は、予習が欠かせない。予習してきて授業に出ると予習をせずに

授業に出るとでは、学習効果に格段の差が出る。予習をすれば、自分の分からないところをはっきりするので、授業中集中して聴く事ができるし、質問もできる。予習せずに授業に臨めば、どこが分からないのかも分からなくとも不思議はない。

かつての読み書き偏重の反動で、音声英語がもてはやされている現在、リーディングの宿題を出すと、「えっ、読むんですか。」とびっくりされ、意外といった反応をみせる学生が多い。自分であらかじめ考える事をせずに、はじめから答が与えられる事に慣れてしまって、それが当然といった環境にいと、学習が受身でいつも与えられる事のみ求めるようになってしまう。いいかえれば、考えるという過程が抜けてしまって、安易に与えられた訳文を丸暗記して、試験の時にそれをはき出す事が学習だと思っている学生が多いように思われる。訳の要となるところや文法事項を説明して、あとは自分で訳すようにいうと、不親切な教師というレッテルをはられ、「ちゃんと訳して下さい。」と学生から要求される事が多い。自分で訳してこそ個性のある訳文ができるのに、教師の訳文を丸暗記する等という事に時間を使うのでは、学習がおもしろくなくなるのは当然ではないだろうか。個性とか独創性がこれだけ求められているにもかかわらず、建前はともかく実質的に学生が期待しているのは、逆に形だけの余りにも画一的なものであるような気がしてならない。

書く力をのばす為の英語表現にしても、教師が時間をかけて添削し、文法的な間違いを含め再考を要する表現に印をつけて返却し、それを学生に自ら訂正させ、再度教師が目を通してから個別に学生をよんで面接をし、どのように直したらいいのか、又何故そう直さねばならないのかを説明しているが、まず朱が入る事に極端な抵抗を示す。綴り等辞書をひけばわかるのに、自己訂正が不十分な学生がほとんどである。一度書いたら、それでおしまいと思っているのか、直される事自体に不快感を表明する学生がかなりいる。なかには何故直さなければいけないの

かを説明しようとする、あからさまに嫌な顔をして、「もういいです。」とふくれてしまう学生すらいる。これ迄間違いを指摘されたり、注意されたりといった経験が余りなかった為なのか、自分の弱いところを直視する事に耐えられず、嫌な事は避けて逃げてしまう傾向があるように思われる。

ところで、すぐ消えてしまう音声英語の場合は、たとい間違っても、聴き手の方で正しく聴いてしまう場合がかなりある。特に英語の場合は stress-timed language⁽²⁾といわれているように、英語独特のリズムの為に聞こえにくいところがあるので、文強勢がおかれているところが正しく発音されていれば、他はたとい多少の間違いがあっても、その間違いの部分が聞こえにくいという事もあって、聴き手が推測する時に正しく推測してしまう事が多い。その為話し手の方にも分かってもらえたという満足感が生まれ、現実には正しい表現をしていなくても、通じたという現実から、時には自分は英語ができるといった錯覚におちいって、「英語はばっちり」等という思いがけない言葉を、余り学力があるとは思えない学生からまじで聞く事になる。現実の会話はたとい片言であろうと、相手によってはかなり補ってもらえる事があるので、英会話に於いては、自分の学力不足を直視するという、学生からすれば、できればしたくない状況を避けられるという利点がある。通じたと思っている現実も、実際には聴き手の側の補足、推測、誘導等によって可能になった場合もかなりあるのに、自力で通じさせたと錯覚してしまう場合もかなりあるのではないと思われる。確かに会話はかなり雰囲気左右される事も事実である。筆者自身の経験でも、外国の空港におりただただ、英語が口をついて出易くなるという事があったし、極端な場合には、日本にいても外国人の顔のみただけで、相手が日本語をしゃべっているにもかかわらず、又、英語をしゃべるべき状況ではないと分かっているが、口べたな筆者でさえ、一種の条件付けなのであろうか、英語で受け答えしたくなるとい

う不思議な経験をした事があった。

語学の学習に於いて音声言語から入るという事は正論だと思うが、いろいろな国々が地続きのヨーロッパと違って、日本では単語レベルの片言の外来語のはんらんという現象はみられるものの、日常生活の中で聞く事を通して自己修正できるだけの量の外国語によるコミュニケーションを耳にする機会には恵まれていない。いかえれば、日常生活を通して英語の上達を期待する事は、特別な言語環境にいる人、例えば仕事で日常英語を使ってコミュニケーションをとっている人、外国人の友達としばしば行き来している人等を除けば、難しいといわざるを得ない。つまり日本人の場合は、日常生活の中でごく自然に英会話の上達に不可欠な単語や熟語をふやせるような地理的環境にはないという事を認識する必要がある。それを補うのが読んだり書いたりする事を通して行う知識の確認ではないかと考える。学生が望むような、受け身な態度で何の準備もしてこずに、唯座っているだけで分かるような授業から得られるのは、「挨拶だけの英会話」以上のものではない。ほんとうの意味での英語によるコミュニケーションの上達を望むのであれば、リーディングも文法の知識も英作文も不可欠であろう。まずどこが分からないのか、間違っているのかを自分で認識する必要がある。

ところが結果だけが重視され、自ら考える過程が抜け落ちている事に慣れてしまっている故か、間違い特権は学生にしか与えられていない事を話してきかせても、間違い事を極端に嫌い、さされて黒板に出て書く場合でも、それでいいのかどうか教師にきいてからでないと書こうとしない学生がかなりいる。口頭で答える場合でも、周りの友達と相談してからでないと答えないといった現象がみられる。最近はカンニング学習という言葉すら出てきているという事を、LLA の研究会で放送大学の講演者からきいて、唾然とした事があった。

自らを厳しくみつめる事をせずに、相手にはばかり要求し、相手が悪いと何でも相手のせい

してしまう。若い時に内省の機会を持たずに、仲間と群れている事にのみ楽しみを見つけ、喜びを感じる。自分でほんとうにしたいのかどうか考えた上で何かしようとするのではなく、仲間がするかどうかきいて、一緒にできるならしてみようかといった発想らしい。英語専攻でこれ迄数年間実施して来て、専攻の売りの一つになっていたホテル実習の希望者が、昨年度は極端に少なかった為、学生に周知する意味で再度情報を流したところ、お互いに「行く？」とききあっている。その内一人が「行かない」といい出すと、「三週間は長すぎる。一週間位ならいいけれど…それに no pay では嫌だ」という。そんなやりとりがあって、はじめに教師の話を書きいて申しこんでいた学生迄、事前指導を受けた後になって止めるといいだす始末。特に最近ではホテル実習に対して、学生の側に学ぶという姿勢が感じられない。軽いアルバイト感覚で報酬のない事に不満を感じ、未熟な者を受け入れる実習先のホテル側の迷惑等思い及ばない。拘束を嫌い、自分達の尺度でしか物がみれない学生にクレームがつき、希望者数の激減と相まって、残念ながらホテル実習の継続が難しいのではと思われる状況になってきている。

最近の学生の話をお聴きしていると、習うという立場の者もつ謙虚さが感じられない。教室に座る時には教壇に背を向けてそっぽを向いて座り、窓から外を眺めている者さえいる。出席をとりはじめても、授業が始まって、大声でのおしゃべりは際限なく続き、時には教師のくせや声の調子をまねて笑いあったり、悪気はないものの、まさにしたい放題、とても学習の場にいるとは思えない雰囲気である。自分自身はさされた時、間違えて答えるといった程度のささいな事でも傷つき易く、本能的に傷つく事を避ける言動に出るにもかかわらず、自分が相手を傷つける事には無頓着、というより相手の立場をおもんばかるという事をしないので、自分の言動が他人を傷つけているという現実に気付いてさえいないように思われる。大方の学生の世界は自分中心にまわっていて、なかには利用す

る時には他専攻の教員に迄いろいろと頼みにくるが、廊下で出あっても会釈一つしないという学生もいる。人間関係の基本を家庭でも学校生活でも学ぶ機会を持たなかった学生が、これといったしたい事もまだ見つからぬまま、唯楽しく時を過ごせばいいといった位の軽い気持で、短大に来ていているというのが、大方の本学英語学科の学生の現状ではないだろうか。

4. 生活習慣

学校は学生がそこで学ぶのみならず、教える側にとっても、教師が学生から学ぶ事を含めて学びの場であると筆者は思っている。しかし最近の学生の多くは、学校に勉強する為に来ていないように思える。資格に直結する学科の学生を除けば、大部分の学生にとっての短大は、友人との交流の場であり、授業は付け足しにすぎないらしい。教師が教室に入ってきて、授業が始まっても、勉強の態勢に入らず、おしゃべりに花を咲かせている。出席をとっていても、大声でのおしゃべりは続き、返事をしそびれた学生が出席を取り終える迄待てずに、時に途中で割って入り、名前をいって「～います。」という。又出席をとり終えると必ずといっていい程「聞こえませんでした。」ではなく、「呼ばれませんでした。」といいにくる学生がでてくる。「名前を呼ばずに、わざわざ欠席の印はつけないので、呼ばない事はあり得ないし、欠席につけた人は最後に再度名前を呼びあげて確認をとっているのでは、呼ばなかった等という事はあり得ない。」と説明しても納得せず、不服そうな顔をする。

出席をとる時に限らず、静かにするよう注意しても、おしゃべりをやめるのはその時一瞬だけで、又すぐに騒がしくなる。90分間じっと座っている事自体難しいようだ。ましてや90分間集中して学習する事は、大部分の学生にとって不可能な感を、この数年来とみに強くしている。50分授業の中学でも授業中ずっと座っているのではなく、教室の中を動きまわる活動を取

り入れた学習をしているのを、教育実習の巡回に行き目にあたりにし、そういった学習環境の中で過ごしてきていけば、短大に来て急に90分間じっと座って集中力を持続させる事は至難のわざである、というより出来なくて当然なのかもしれない。しかも日常生活の中でも我慢する習慣を身につけていない学生が多く、よくいえば天真らん漫、教室の中でも勝手気ままにふるまっているように見える。事実最近授業の途中で、「先生、もう無理だよ。」とはっきり口に出す学生もいる。なかには珍らしく積極的に手を挙げたので、教科に関する質問かと思うと、「お手洗いに行っていていいですか。」とか、「お手洗いに行ってきます。」と行って出て行ってしまい、なかなか戻ってこない学生も目につく。生理現象なので許してはいるが、休憩時間にお手洗いをすましておくといった配慮をしない学生がふえている。ましてや授業がわからなければ、学生にとって教室は苦行そのものである事、容易に推測ができる。お手洗いを口実にして、授業から抜け出したがっているのかもしれない。

英語表現の時間に、アメリカの学生は学期中、特に週日は勉学に専念し、アルバイトは普通休暇中にするという趣旨の事が書かれた英文のメッセージを与え、日本の現状と比較して感想を書くという課題を課した事があった。ほとんどの学生は、アルバイトは社会勉強ができるので学校の勉強より大事だという意見で、今後もアルバイトは是非続けたいと述べている。現に夜遅く迄、学生によっては明け方近く迄アルバイトをしている為、朝起きられず、遅刻したり、欠席したり、又授業に出ている、一時限目から眠ってしまったたりしている学生がいる。このように現実に学業にさしつかえる事態になっても、尚かつアルバイトはやめたくない、大切だという学生が多い。アメリカではとる科目ごとに授業料を払う制度になっているので、落とせば再度授業料を払わねばならない事も関係していると思うが、アルバイトは勉強にさしつかえのない程度にする事が常識となっている。ところが

日本の場合、ほとんどの親が授業料を負担しているにもかかわらず、アルバイトにのめりこんで勉強がおろそかになっている学生が目につく。アルバイトにあれ程時間をとられなかったら、もっとのびたであろうと残念に思った学生が何人もいる。しかも学費の為にアルバイトをしている学生は、ほとんどいない。つまり学校の勉強よりアルバイトの方に価値をおいているわけで、勉強は二の次というのが、現実の学生の価値感であり、実態であると考えざるを得ない。建前はともかく、残念ながら形だけの単位さえもらえて卒業できればよいと考えているようだ。

そこで学生がどのような時間の使い方をしていいのか知りたいという事もあって、英語専攻1年の英語表現1bの学生を対象に、My Typical Dayという課題を出した。一日の時間配分を表にした上で英語で叙述させたが、家で勉強の時間をとっている者は、14名中1名だけであった。ほとんどの学生にとって勉強は授業中だけというのが実態である。教師から見ると、あれだけ授業中おしゃべりをしていてどこが一生懸命なのか思うのだが、学校で一生懸命勉強していると書いているのだから、学生の意識の中では精一杯やっていると思わなければならないのだろう。勉強は学校だけで精一杯、とても家でまで勉強する気にはなれないというのが本根のように思う。だからこそ何の躊躇もなく、仕事は家に持ち込まないとかいって、テキストも辞書も学校のロッカーにおいて帰宅してしまう。これでは予習復習を前提とした授業は成り立つわけがない。英語に接する時間がこんなに少なくても、英語が身につかなくても不思議はない。

事実、本来であれば入試の段階で当然はねられているような学生を、経営上の理由で、極端な学力不足を重重承知の上で受け入れているので、学力のばらつきが大きく、特に最近、短大とはいえ実質は中学生レベルの英語力もない学生が、英語専攻のかなりの部分を占めている。到底いっせい授業が成り立つ状況ではない。教育上は少人数しか入学しなかった事が幸して、

英語表現等授業中も教師が教壇からおりて個々の学生のところに出向き、個別に指導する事が可能になったので、それぞれの学生のニーズに合わせ、特に五文型も知らず全く基礎のできていない学生には、主語と述語の関係から始めて、中学生の家庭教師さながらの授業をしている。それでも「先生わかった。ようやく先がみえてきた感じがするよ。僕頑張るよ。」といわれると、この調子で勉強に取り組んでもらえればと願うのだが、現実には意欲はあっても、生活習慣が勉強中心に成り立っていないので実行は難しく、ちょっと困難にぶつかると、容易にくじけてしまい、持続して勉強する事は難しい。実際一時限目から机にうつ伏せて眠ってしまった学生が目につく。特に夜アルバイトをしている学生は、一時限目から疲れはてて唯教室に来て座っている。とてもこれから勉強に入る態勢にはない。いくら若くて体力があるとはいえ、これではとても身体がもたないであろう。こういう生活では授業中の居眠りは仕方がないのかもしれない。このような状態でも尚かつアルバイトを止める気は毛頭ないのであるから、なかには朝起きられない為に欠席がちになる学生もでてくる。

もともと勉強がしくて入ってくるわけではないので、授業中悪びれもせず化粧道具を出して堂々と化粧し、鏡に見入っている学生もかなり目につく。こういう光景は本学の学生に限らず電車の中でも度々見かけるが、他人の目等気にならないようで、所かまわず自分のしたい事をしているように見える。非常勤講師からもクレームが出ているスクールバスの中の席取りにしても、知っている仲間同志にしか目がいかない。同じ空間を共有している他者は眼中になく、自分達さえ楽ができて楽しければいいといった発想しかない。本来公共の乗物は、First come, first served. が原則であるのに、後から来る仲間の為に、立っている人がいるのに席を確保しておく。極端な場合にはバスが走り出しても尚あけたままにしておく。そしてそれが当り前のようになってしまっている。短大に於

いても学力以前の生活習慣マナーは、避けて通れない問題になっている。

5. 高等教育機関としてのアイデンティティ

1987年1月の米連邦教育省・日本研究グループの報告書 Japanese Education Today によれば、日本の大学は教育機関であるよりは学歴賦与機関であるとみられている。⁽³⁾ 勿論例外はあるものの、大衆大学群⁽⁴⁾ に分類される大学ではこの傾向は否めない。学生が消費者になり切ってしまうと、学生が高等教育機関に求めるのは教育の中味ではなく、大卒や短大卒といったレッテルとなる。一方不況が長びき終身雇用が崩れてくると、企業が高度成長下に慣行としてきた独自の企業内訓練という教育投資の余裕がなくなり、高等教育機関に役に立つ実践的な職業教育を期待する事になる。大衆化した大学の職業学校化・専門学校化が生き残る為の一つの可能性といわれる所以であろう。しかし現在のように社会が経済を中心に動いていると、余りにも企業の論理にふりまわされ、消費社会迎合的となって、高等教育機関としてのアイデンティティを無くしてしまう危険性があるのではと危惧される。

確かに技術の進歩は目覚ましい。特に情報機器の発達には各方面に大きな変化をもたらしている。しかし安楽さ、便利さばかり追求していくと、大方の人間は機器にふりまわされ、人間としての尊厳を感じる事なく、不破雷同型の享乐的な人生を送るようになる危険性があるのではと憂慮される。学ぶ事を目的に学校に来るのではなく、少しでも楽に単位を取得して卒業したいと思っているような学生に媚びたりへつらったりするのではなく、真の学生サービスとは何かを考える必要がある。

自己責任という事が声高に叫ばれる昨今、本能のままに行動する事は教養の対極にある事を知り、受身の快樂を求めるとは厳しく自己に対決し、自分で考えて積極的にかかわって

いこうとする態度を培う事、いいかえれば学生
の人間形成、人生の構築に役立つような内容の
サービスを提供する必要がある。技術が発達し、
ボタン一つ押せば事が足りてしまう世の中に向っ
ている現在、思考力を養う事は大変な事ではあ
るが、考える事を止めてしまつては人間が人間
たり得なくなつてしまう。好き嫌いで全てを片
付けるのでなく、自らを制し、他者への関心を
含めて視野を広げ、画一的になる事なく多様な
価値感の存在を知り、謙虚に他人の話に耳を傾
けながら判断力を養い、物事に積極的にかかわ
っていく事ができるよう、手助けをする事が教育
に携わる者に課せられた課題ではないかと思う。

英文科、英語学科の衰退は全国的なものであ
るが、グローバル化が進んでいる情報時代にあっ
て、英語そのものの必要性は高い。使える英語
を身につける事は今迄にもまして求められてい
る。様々なレベルの学生に対応する為には、ま
ずそれぞれの学生のレベルを把握し、どのよう
にしてもう一つ上のレベルにもっていくかとい
う発想で指導をするきめ細かな授業が教員側に
求められるであろう。又情報機器の使用は自習
用も含めて学生の興味を呼びさますのにおおい
に役に立つものと期待される。大衆化時代の英
語の学習においても、学生には自分で考えてみ
る習慣を身につけ、困難の後にくる学ぶ喜びを
味わい、主体性を持って生きる為の基礎作りを
してほしいと願っている。

注

- (1) 喜多村和之、『大学淘汰の時代－消費社会の高
等教育』中央公論社，1990，p.176.
- (2) Peter Ladefoged; *A Course in Phonetics*,
2nd Edition, Harcourt Brace Jovanovich,
Inc., 1982, p.224.
- (3) 喜多村，前掲書，p.168.
- (4) 藤原書店編集部『大学改革とは何か－大学人か
らの報告と提言』，藤原書店，1993，p.173.